# 学習指導要領との関連から ――「社会科」「総合的な学習」

| | | |
|---|---|---|
| 社会科 | 目標 | (1) 地域の産業や消費生活の様子，人々の健康な生活や良好な生活環境及び安全を守るための諸活動について理解できるようにし，地域社会の一員としての自覚をもつようにする。<br>(2) 地域の地理的環境，人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし，地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。<br>(3) 地域における社会的事象を観察，調査するとともに，地図や各種の具体的資料を効果的に活用し，地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力，調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。 |
| | 内容 | (2) 地域の人々の生産や販売について，次のことを見学したり調査したりして調べ，それらの仕事に携わっている人々の工夫を考えるようにする。<br>(5) 地域の人々の生活について，次のことを見学，調査したり年表にまとめたりして調べ，人々の生活の変化や人々の願い，地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする。<br>ア　古くから残る暮らしにかかわる道具，それらを使っていたころの暮らしの様子 |
| 総合的な学習 | 目標 | 横断的･総合的な学習や探究的な学習を通して，自ら課題を見付け，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに，学び方やものの考え方を身に付け，問題の解決や探究活動に主体的，創造的，協同的に取り組む態度を育て，自己の生き方を考えることができるようにする。 |
| 項目タイトル | | ● 学習内容(1)　わが家の「ごみ」を調べてみよう …… P.6<br>● 学習内容(2)　スーパーマーケットでリサイクルを発見しよう …… P.7<br>● 学習内容(3)　ごみのリサイクル …… P.8<br>● 学習内容(4)　PET ボトルのリサイクル …… P.9<br>● 学習内容(5)　循環型社会をめざす「３つのＲ」…… P.10 ～ 11<br>● 学習内容(6)　ごみ処理の「今」と「昔」…… P.12<br>● 学習内容(7)　私たちにできること① まちの美化 …… P.13<br>● 学習内容(8)　私たちにできること② ごみを減らす …… P.14<br>● 学校実践例　隣接する高校生徒と協力して地域を一斉清掃 …… P.15<br>● 学校実践例　中学校やＰＴＡ、地域ぐるみで環境美化を実践 …… P.16 |

# わが家の「ごみ」を調べてみよう

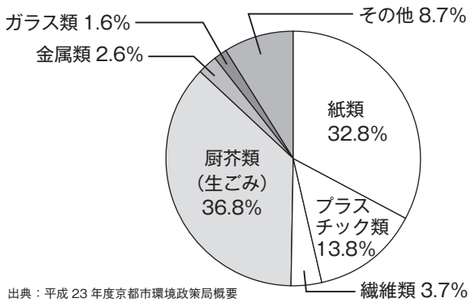
**ねらい**
- **家庭ごみの量の多さを理解する。**
- **家庭ごみの内訳を知る。**
- **家庭での３Ｒの取り組みの大事さを理解する。**

わが家はどれほどのごみを排出しているのでしょう。循環型社会をつくる取り組みは、まず家庭から行う必要があります。

## １人が１日に出すごみは約１キロ！

家庭やオフィス、飲食店などから排出されるごみを「一般廃棄物」といいます。その量は年間で4625万トン。これは東京ドーム124杯分にあたります。そして、1人が1日に出すごみの量は平均で994グラム（ともに2009年度、P.10グラフ参照）。2000年度の1185グラムに比べれば少なくなってきてはいますが、リデュース（出すごみの量を減らす）、リユース（繰り返し使う）、リサイクル（資源として活かす）の「３R」の努力と工夫が、それぞれの家庭や職場でもっと行われる必要があります。

●燃やすごみの内訳（物理的組成、京都市平成21年度）




出典：平成23年度京都市環境政策局概要

## 大事なのはごみを出さないこと

家庭から出るごみのなかで、もっとも多いのは生ごみで、ごみの約4割を占めています。そのなかには「調理くず」と「食べ残し」、ときには「まったく手をつけていないもの」もあります。さまざまな製品や食品をつつんでいた容器包装も大きな割合を占めています。

家庭から出るごみのうち、食品トレーや牛乳パック、古紙などは、きちんと分別して資源回収に出すことで、リサイクルできます。「３R」のなかでもっとも大事なことは、ごみを多く出さない生活を心がける「リデュース」です。たとえばマイバッグを持参してレジ袋をもらわないようにする、食べ残しが出ないようにして生ごみを減らす、過剰な包装は断る、などの努力が必要です。

**調べ学習**

### ●自分の家で１週間にどれだけのごみが出るか、記録してみよう

**手順** 燃やすごみ・プラごみは重さで、びん、缶、PETボトル、古紙、食品トレーなどは個数で数えます。

**展開** 上のごみを、繰り返して使えるもの、資源としてリサイクルされるもの、ごみとして処分されるものに分類してみよう。



# スーパーマーケットでリサイクルを発見しよう

**ねらい**
- **身近なスーパーマーケットでリサイクルが実際に行われていることを知る。**
- **リサイクルのために、消費者の自覚が必要であることを理解する。**

いつも買い物をしている近所のスーパーマーケット。そこには身近なリサイクルを見ることができます。

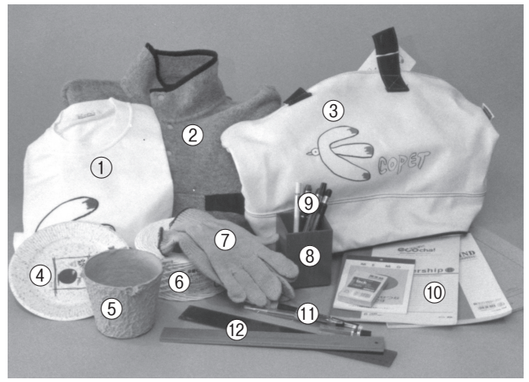
## スーパーマーケットなどが行う「店頭回収」

食品トレー、紙パック、アルミ缶、PETボトルなどの回収ボックスをスーパーマーケットなどの店頭に置いて、消費者が使い終わったものを持ち込めるようにすることを「店頭回収」といいます。回収品は、再生事業者が引き取り、プラスチック原料や化学原料、燃料として再利用されます。店頭回収には、電気店での電池の回収や酒店でのビールびんや一升びんの回収もあります。

店頭回収は、正しい分別が確実に行われる一方で、使った人があらかじめ紙パックを切り開くなどの手間がかかるため、回収率は高くありません。

## 「リサイクル商品」を探してみよう

回収された食品トレーは、再加工して再び食品トレーに生まれ変わります。また、ＰＥＴボトルは、再びＰＥＴボトルに加工されたり、細かく砕いてＰＥＴ樹脂にして軍手や帽子などに生まれ変わったりします。紙容器から再生利用されたティッシュペーパーやトイレットペーパーなどは、スーパーマーケットでも見ることができるので、探してみましょう。回収されたびんや缶から再生利用されたものが家の中で、どんなものがあるか調べてみよう。




①Ｔシャツ（PETボトル）②フリース（PETボトル）③トートバッグ（PETボトル）④紙皿（リンゴの搾りかす）⑤育苗ポット（古紙）⑥紙ひも（牛乳パック）⑦軍手（PETボトル）⑧ペン立て（発泡トレー）⑨蛍光ペン（再生樹脂）⑩ノート、付箋（古紙）⑪ボールペン（再生樹脂）⑫定規（発泡スチロール）

**調べ学習**

### ●近所のスーパーマーケットで、どんなものを店頭回収しているか調べてみよう

**手順** スーパーマーケットのリサイクルコーナーに行って、回収品目を確認します。

**展開** 区や市や町で回収していないものとの違いを見つけ、回収されたものは、どのようにリサイクルされているのか聞いてみよう。

# ごみのリサイクル

**ねらい**
- **ごみの種類、分別法を理解し再利用について考え、家庭生活を工夫する。**

ごみの排出をいかに抑えるかは資源の有効利用、最終処分場の確保の意味からも非常に大切なことです。
ここでは、家庭のごみ、学校のごみのリサイクルついて考えてみましょう。

## いろいろなごみのリサイクル

家や学校で出されるごみにはいろいろありますが、リサイクルできるごみには、次のようなものがあります。生ごみ、びん、アルミ缶、スチール缶、発泡スチロール、PET ボトル、電池、紙、牛乳パック、布、電器製品などです。これらはそれぞれリサイクルの方法が異なります。

**〈リサイクル例〉**
- **アルミ缶**…アルミ製造企業などのメーカーで新しいアルミ缶として再生されます。
  アルミ缶のリサイクル率は 92.6%（平成 22 年度）です。
- **スチール缶**…リサイクルセンターで磁石を使って他の金属などと選り分けられ、鉄骨などの土木資材や製缶メーカーで新しいスチール缶に生れ変わります。
- **発泡スチロール**…梱包材の発泡スチロールは選別され、ペレット化して成形加工をし、ＣＤのケースやおもちゃなどに再利用されます。
- **PET ボトル**…再商品化事業者により、細かく砕き（フレーク化）、ワイシャツなどのポリエチレン繊維製品やボールペン、洗剤ボトルなどに生れ変わります。
- **牛乳パック**…製紙メーカーによってティシュペーパー、トイレットペーパーなどに生れ変わります。例えば牛乳パック 30 枚でトイレットペーパー５個分になります。

## 最終処分場は限界？

高度成長期以降、一般廃棄物が大量に排出されるようになったため、これを埋め立てる「最終処分場」がひっ迫してきました。そのため各市町村では、ごみの分別収集によって「３Ｒ」を促進し、埋め立てるごみの量を極力減らす努力をしてきました。たとえば名古屋市では1999年に「ごみ非常事態宣言」を出してごみの分別強化を進めた結果、ごみ処理量が 2007年には７割まで減少しました。

こうした努力の結果、1999 年に12.9 年だった残余年数（処分場がいっぱいになるまでにかかる年数）が、2009 年には 18.7 年まで延ばすことができました。それでも、処分場に余裕がないことは変わらず、今まで以上の努力が求められます。

### 調べ学習

**●家、学校でででるごみを調べ分類する。**
**資源ごみ、有害ごみ、可燃・不燃ごみ、粗大ごみに仕分けしてみる。**

**手順** グループに分かれて、学校から出るごみ、家庭から出るごみの担当を決め、どのような種類のごみが出るか書き出し、それらを分類します。

**展開** 分類したごみがどのように処理されているか調べてみましょう。



# PET ボトルのリサイクル

**ねらい**
- **分別の重要性を知る。**
- **再生品の購入意識を持つ。**
- **自分でできるリサイクルを実践する。**

生活が豊かになり、さまざまな商品が手軽に買えるようになると、それにつれて容器の形態も多様になってきます。
ここでは PET ボトルについて考えてみましょう。

## PET ボトルの原料はポリエチレンテレフタレート

PET ボトルの原料はポリエチレンテレフタレートと呼ばれるプラスチック樹脂で、頭文字をとって PET（ペット）と呼ばれます。

ポリエチレンテレフタレートは、石油からつくるテレフタル酸とエチレングリコールを原料にして、高温・高真空下で化学反応させて作られた樹脂で、これを溶かして糸にすれば繊維、フィルムにしたものがビデオテープ、ふくらませれば PET ボトルとなります。

## PET ボトルの用途と性質

1970 年代にアメリカで使われ始めた PET ボトルは、日本では 1982 年に登場しました。以来、その使用量は毎年増え続けています。

PET ボトルがこれほどまでに利用される理由としては、その性質が挙げられます。PET ボトルは軽くて輸送・持ち運びに便利で、落としても割れない強度があり、衛生面でも安全で、現在のところ、飲料容器としては非常にすぐれた特性を持っています。また、缶や紙パックと違って、飲み残しても栓をすること（リキャップ）ができ、再度密閉できるので、携帯性にすぐれている点も、大きな特徴といえます。

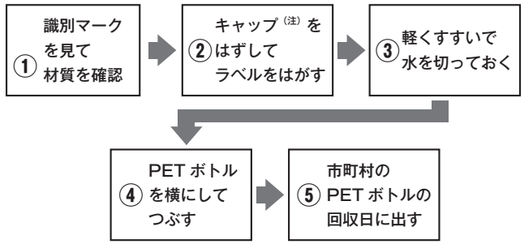
## PET ボトルの再生利用とごみ出し方法

PET ボトルのリサイクルの１つに、回収された PET ボトルを材料として利用し、繊維やシートなどの製品に再生する「マテリアルリサイクル」があります。

このほか、化学原料に戻し再度ボトル用の PET 樹脂にする「ケミカルリサイクル」があります。

PET ボトルのリサイクル率は、約 83.7%（2010年度）で、世界最高水準に達しています。

**PET ボトルをごみに出す時の処理法**




注：キャップはボトル本体と原料が異なるため、「プラスチックごみ」として回収する自治体が多い。

### 調べ学習

**● PET ボトルはどのようにリサイクルされているか調べてみよう。**

**手順**
①自分の家から出されるごみの中から PET ボトルを分別します。
② PET ボトルをごみに出す時の処理方法を調べます。
③回収日に自分で出してみます。

**展開** PET ボトルがどのような再生品になるかを調べ、有効利用について、その大切さを話し合ってみましょう。

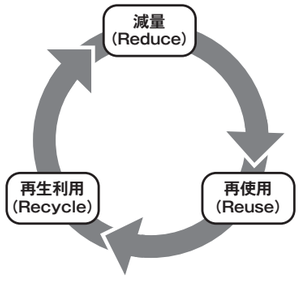
# 循環型社会をめざす「3つのR」

**ねらい**
- **資源の有効利用の大切さを理解する。**
- **３Ｒを進める法律があることを知る。**
- **消費者として取り組むことの大事さを理解する。**

リデュース（減量）、リユース（再使用）、リサイクル（再生利用）の「３つのＲ」は、「循環型社会」実現の大切なキーワードです。

## ３Ｒとは

人々の暮らしが豊かになる一方、大量生産、大量消費によって大量の廃棄物が生み出されるようになり、ごみの処分場が不足したり資源が枯渇したりする心配も生じています。そのため、資源を浪費せずに再利用で循環させる「循環型社会」の実現が叫ばれるようになりました。物の生産、流通、消費からごみ処分までのすべてのサイクルで循環型社会実現を目指すためのキーワードが、リデュース（Reduce）、リユース（Reuse）、リサイクル（Recycle）の頭文字をとった「3R」です。

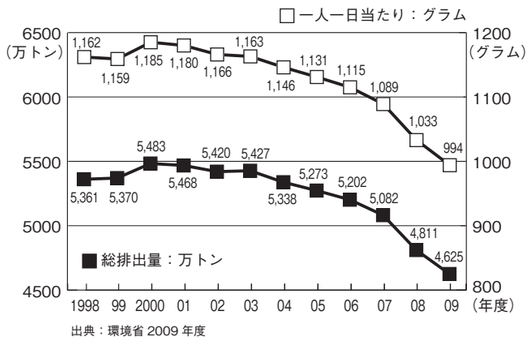



## リデュース（ごみの量を減らそう）

ごみをなるべく作らないこと。企業には、原材料を効率的に利用する製品作りなど、製品の設計、製造、流通過程においてごみの発生を抑えるための努力が求められています。

たとえば清涼飲料などの飲み物をつくる会社では、飲み物の容器の厚みを薄くするなど、容器の軽量化につとめています。消費者には、過剰な包装を断る、買い物袋を持参してスーパーマーケットの袋を減らす、詰め替え製品を使うなどの行動が求められます。家庭から出るごみの量は、３Ｒの様々な取り組みによって、2003 年以降、6 年連続で減少が続いています。

●一般廃棄物の総排出量と一人一日当たり排出量の推移




出典：環境省 2009 年度

## リユース（繰り返し使おう）

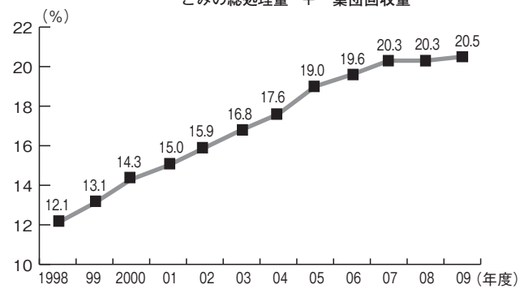
一度使ったものを、そのままの形でもう一度使うこと。生産者や販売者にとっては使用済みの製品や容器などを回収、洗浄、修理して再び使うことです。たとえば、牛乳びんやビールびんなどのリターナブルびんは、回収後、洗浄して再び使用されています。消費者にとっては、使ったものを他のひとに譲る、バザーなどで売る、壊れたものをすぐに捨てず修理して使うことなどです。

## リサイクル（資源として活かそう）

使用後の製品などを資源として再生利用すること。消費者が、市町村による分別収集（びん、缶、古紙など）やスーパーマーケット、コンビニエンスストアで行われる店頭回収（紙パックなど）で回収してもらうことで、資源として再生利用されます。たとえば古紙は再び紙の原料となるし、空き缶は鉄製品やアルミ製品の原料として用いられます。PET ボトルを使用したＴシャツや再生樹脂を使ったボールペンなど、再生原料を使った様々な「リサイクル商品」も登場しています。

●一般廃棄物のリサイクル率

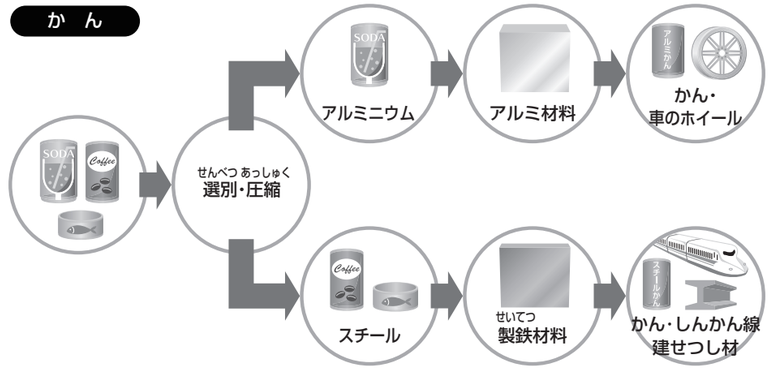
$$\text{リサイクル率}(\%) = \frac{\text{資源化量} + \text{集団回収量}}{\text{ごみの総処理量} + \text{集団回収量}} \times 100$$




出典：環境省 2009 年度

## ３Ｒを推し進める法律

資源の消費や環境への負荷が少ない「循環型社会」を作るために、2001 年１月に「循環型社会形成推進基本法」が施行されました。同法は、再び利用できる廃棄物を「循環資源」と呼び、製品が廃棄物となる段階まで生産者が一定の責任を負う「拡大生産者責任」を明確にしました。リサイクル政策の基本方針を示す同法の下に、資源有効利用促進法が置かれ、さらに個別の分野について「容器包装リサイクル法」「家電リサイクル法」「食品リサイクル法」などが定められています。




### 調べ学習

**自分の家で行っている資源回収を体験してみよう**

**手順**
①自分の家でリサイクルに出しているものを調べます。
（品目、出し方、出す頻度と一回あたりの量）
②出している場所を調べます。
③次回の収集日に自分で出してみます。
④体験結果を持ち寄り、各家庭の違いを話し合ってみます。

**展開**
家族の協力を得て、家庭でリサイクルについて話し合う機会を持つのも一つの方法です。
学校でも、ごみの出し方のルールについて話し合ってみましょう。
また資源回収を通じて、ごみとどのようにかかわっていったらよいのか考えよう。

# ごみ処理の「今」と「昔」

**ねらい**
- **大量消費の始まりによってごみが増えたことを理解する。**
- **ごみの排出量を減らすことが最も大事であることを理解する。**

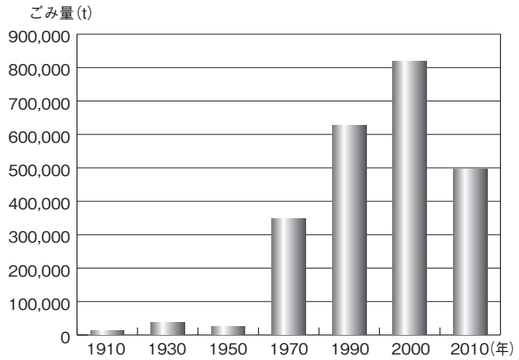
ごみが急増したのは 1960 年代の高度経済成長期から。大量消費が「ごみ問題」を生んだのです。

## 1960年代以降、ごみの排出量が急増

私たちの生活が、大量のごみを出すようになったのは、そう昔のことではありません。たとえば京都市の 2000 年度のごみ排出量は約 82 万トンでしたが、終戦翌年の 1946 年には約 2 万 6000 トンでした。50 年余で 31 倍以上になったのです。

生活から出るごみが増えたのは、60 年代の高度経済成長期のことです。人々の生活が豊かになった一方で、ごみが急増。さらにプラスチックの登場など、ごみの種類も増え、処理に手間がかかるようになりました。市町村が分別回収を行うようになったのもこの時期です。70 年には、ごみについての法律の基本となる「廃棄物処理法」が作られ、ごみの回収や処理の方法が定められました。75 年には、静岡県沼津市が日本で初めて、紙、びん、缶などの「資源ごみ」としての回収を始めました。

●京都市のごみの排出量の推移




出典：京都市環境政策局

## 求められる「ごみを出さない生活」

90 年代後半以降は、資源の有効利用やごみの減量を求める法律が次々と作られたことで、分別回収やリサイクルなど、循環型社会をめざす取り組みが増え、市民の意識も高まってきました。

京都市でも 2000 年代以降、ごみの減量に取り組むことで、ごみ排出量を減らすことに成功していることが、グラフからも分かります。

ごみ問題の克服のために、暮らしのなかで「３Ｒ」を心がけること、とくに、ごみを少なくするライフスタイルが求められています。

### 調べ学習

**●身近なお年寄りに、昔の暮らしについて聞いてみよう**

**手順**

①衣服、食事、電化製品など、生活に必要なものが、昔の暮らしのなかではどうだったのか、インタビューしてみます。

②昔の暮らしと現代の暮らしを比較する表をつくってみます。

③現代の暮らしのなかでごみを減らす方法を考えてみます。



# 私たちにできること① まちの美化

**ねらい**
- **まちを美しくする行為について考える。**
- **まちの美化、清掃を誰が行っているのか考える。**

まち美化は、行政だけでなく、様々な人々によって担われています。美化活動は、自分のまちに愛着をもつ「まちづくりの第一歩」です。

## 住民の自主的な参加が支える「まち美化」

まちの清掃、美化には多くの人が関わっています。市町村の清掃部署、清掃部署から委託された民間清掃会社、ボランティア団体、一斉清掃などの度に美化活動に参加するボランティア、自治会・町会、商業施設の持ち主、商店街組合、公園愛護会など多様です。

市民による清掃活動

道路や公園など公共空間の清掃は、行政とともに住民のボランティア活動によっても支えられているのです。最近では、住民がまちをわが子のように愛情をもって清掃する「アダプト・プログラム」（P.26 参照）も全国に広がっています。

## まち美化は「まちづくりの第一歩」

まち美化の大きな課題は「散乱ごみ」です。とくに、コンビニエンスストアや自動販売機で買った後、投げ捨てられた空き缶やビニール袋などは、自然に分解しないのでいつまでもまち中に散乱しがちです。多くの自治体でポイ捨て禁止条例を制定しているほか、清涼飲料の業界団体も、自販機わきに使用済み容器の回収ボックスを置くように取り決めるなどの対策を行っています。

まち美化は、だれもが参加できる活動です。自分の住むまちへの愛着を深めるためにも、積極的に「まち美化」に参加していきましょう。

### コラム
#### 自販機の環境配慮と災害対応

自動販売機をめぐっては、周辺での空き缶などの散乱に加えて、消費電力量の問題も指摘されてきました。しかし 90 年代以降、省エネ対策が進められ、電力需要がピークとなる夏場の午後には冷却運転をストップする機能を備えるなどの工夫により、１台当たりの年間消費量はかつての半分以下まで抑えられるようになりました。さらに最近は、災害時に自販機を活用する取り組みが進み、災害時に自治体の情報を電光掲示板に表示したり、無料で飲料を提供する機能をもったライフラインを担う自販機が増えています。

### 調べ学習

**誰がまちを清掃しているのだろう**

**手順**

①駅前、公園、通学路など、児童・生徒になじみのある場所を選び、「誰が」「どういう方法で」「どれくらいの頻度で」清掃を行っているのでしょうか。市町村の担当部署（清掃や道路など）に聞いてまとめてみましょう。

②可能であれば、実際に清掃を行っている人（市町村職員、住民、清掃会社など）に話を聞いてみましょう。

# 私たちにできること② ごみを減らす

**ねらい**
- **よく考えて買い物をする意識を身につける。**
- **ごみの量を減らす工夫の大切さを理解する。**

「3R」でもっとも大事な「リデュース」（ごみを出さない）。家庭ではどんな工夫が必要なのでしょうか。

## 大事なのはごみを出さないこと

回収された分別ごみのうち、資源として再利用できないものは、焼却され、埋め立てられることになります。しかし、焼却には大気汚染が伴うし、埋め立て処分場も余裕がなくなり限界に迫っています。だから、家庭や職場での「３R」の取り組みとして最も大事なことは「リデュース」なのです。

## よく考えて買い物をする

買い物のときはマイバッグを持参する、「衝動買い」「まとめ買い」などをやめる、などの工夫をしましょう。とくに、生ごみの6分の1は、まったく手をつけられていない食品といわれています。食べ物を買いすぎず、作りすぎず、食べ残さず、食べ物をごみにしない生活を心がけたいものです。

## まだ使えるものは修理して使う

壊れたものでも、自分で修理して使えないか調べましょう。たとえば服が破れても、縫い直せば使えます。家電製品、靴、布団などは、まちのお店で修理してもらうことができます。また、要らなくなった服やもの、本は、リサイクルショップや古本屋などに持っていきましょう（売りに行く際は保護者の同伴が必要です）。安易にごみにしない工夫が大切です。

### コラム―生ごみは工夫で減らせる

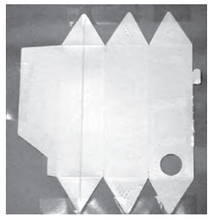
家庭から出るごみの約４割は生ごみです。ところが、この生ごみの８割が水分なのです。この水分を減らすだけで生ごみを大きく減らすことができます。そのための方法は三つあります。

①水に濡らさない。野菜を洗うとき、使わない部分は先に切っておきましょう。また玉ねぎの皮のように乾いたものは、わざわざ水を含ませることのないよう、別に捨てましょう。②よく絞る。調理くずなどは、よく絞って水を切ります。分別に出す前にもう一回絞りましょう。③乾かす。匂いの気にならない季節であれば、新聞紙に包んで乾くまで置いて水分を飛ばすのもよいでしょう。

最近は電動式生ごみ処理機もあり、水分を蒸発させたり、家庭菜園で使える堆肥にすることもできるようになりました。

## 調べ学習

### ●容器包装を解体してみよう



**手順**
①各家庭で買ったお菓子やおもちゃなどの容器包装を学校に持ちよります。
②持ちよった容器包装を、右の写真のように解体して平面に広げます。
③解体した容器包装をパネルに張って標本にしてみます。
④どの商品にどれほどの容器包装が使われているか、その役割や必要性について話し合います。



**学校実践事例**

# 隣接する高校生徒と協力して地域を一斉清掃

## 三重県桑名市立七和小学校

（環境美化教育優良校表彰事業　第 11 回　散乱防止部門優良校）

七和小学校では、隣接する県立桑名工業高校の生徒会と連携して「地域一斉清掃運動」として地域のごみ拾い運動を展開するなど、積極的な環境活動を行っています。

七和小学校が地域一斉清掃活動を始めたのは 1996 年。以来、5、6、10 月と、年に３回の清掃活動を続けてきました。自治会を通して住民や保護者の参加協力も得ており、励ましの言葉をかけられたり、一緒に清掃してくれたりする住民の方もいるそうです。活動の結果、目に見えて散乱ごみが減少した場所もあります。

地域一斉清掃活動は５、６年生中心に行われ、清掃･ごみ拾い活動後は、集めたごみを可燃物、アルミ、スチール、不燃物などに分類。しばらくの間、展示することで、児童が達成感を味わえるようにしています。それを踏まえて、各学級で「どうしたらごみを減らすことができるか」と振り返ることで、環境への意識を高めています。

また、年３回の活動のうち、６月の活動は県立桑名工業高校の生徒と共同で実施。七和地区全体を 28 地域に分けて、高校生と小学生が一緒に班を作って行います。これをきっかけに文化祭などを通じた両校の交流が深まりました。

2009 年度には、「七和クリーンキャンペーン」も始まりました。これは、５、６年生中心の地域一斉活動と異なり、全学年と併設の幼稚園も参加するもので、中・低学年の児童からの声を受けて始まったものです。高学年児童の美化委員会の運営の下、登校時に取り組んでいます。美化委員会の児童たちは、全校集会でクリーンキャンペーンの成果などを発表し、日常の清掃活動への意識を高める呼びかけを行います。こうした活動により、ふだん遊んでいる場所にたくさんのごみが落ちていることに気がつき、清掃活動の大切さを理解するなど、児童の意識も変化しています。

最近では、文化祭「にじ色フェスティバル」や、学校とＰＴＡが共催する親子工作教室などでも環境をテーマにした企画を行っています。

高校生と協力して清掃活動

拾い集めたアルミ缶を洗う

学校実践
事例

# 中学校やＰＴＡ、地域ぐるみで環境美化を実践

## 鹿児島県日置市立土橋小学校

（環境美化教育優良校表彰事業　第１１回　農林水産大臣賞）

土橋小学校では、「準備３分ボランティア」と呼ばれる朝のボランティアや、アルミ缶の回収など、環境美化と「３Ｒ」の様々な活動を行っています。とくに年に数回、校区内の清掃活動や資源リサイクル活動を、ＰＴＡを始めとする住民の協力を得て行うなど、地域ぐるみで環境を守る取り組みを行っています。

土橋地区は、土橋小学校と土橋中学校の一小一中の体制となっており、年に１度、小中合同のボランティア活動を行います。中学生が小学生に教えながら校区内を清掃。その際は、空き缶やごみの散乱状況などを調査してその結果を地図にまとめて展示することで、児童や保護者に向けた啓発を行います。

年に２回行われる資源リサイクル活動では、空き缶、新聞紙、段ボール、雑誌、ビール瓶などを保護者と子ども達で集めます。このときは、自治公民館に回収ボックスを設置するほか、家庭や地元企業も積極的に協力するなど、地域の人々の参加で行われています。

総合的な学習の時間にも、校区内環境マップづくりを行ったり、校区内を流れる長松川の調査を行ったりすることで、自然環境やごみをめぐる状況などを考える機会を作っています。

このように、土橋小学校の様々な環境美化活動は、保護者や住民の環境意識に支えられ、中学校やＰＴＡを始めとする地域団体の積極的な協力を得て進められているのが特長といえます。

親子で PET ボトルを利用した道具作り

資源リサイクル活動（年２回実施）

校区のごみステーションマップ